

第6回 共通教育再編WG議事要録（案）

日 時：令和4年1月24日（月）15時50分～17時30分

形 態：オンライン会議（Microsoft Teams）

出席者：奥田学長特別補佐（座長）、高橋共通教育主管（初年次部会長、外国語部会長）、
中川人文社会科学部長、岡谷教育学部長、津江理工学部長、菅沼医学部長、枝重
農林海洋科学部長、大石地域協働学部長、佐々データサイエンス部会長

欠席者：塩崎大学教育創造センター長

陪席者：中山学務課長、松田学生課長、藤原物部総務課長、西村学務課専門員、岩崎人文
社会科学部教務係長、斎藤教育学部教務係長、福島理工学部教務係長、名和地域
協働学部教務係長、東学生課教務係長、黒田物部総務課学務係長、阿賀学務課全
学・共通教育係員、山中学務課全学・共通教育係員

配付資料：

○第5回共通教育再編WG議事要録（案）

○各部会の最終報告について

- ・初年次部会【資料 1-1】
- ・外国語部会【資料 1-2】
- ・データサイエンス部会【資料 1-3】
- ・共通教育再編WG部会委員名簿【資料 1-4】

○新しい教育科目区分（案）【資料 2】

○日本における新たな教養教育の展開「高年次教養教育の挑戦」【参考資料 1】

議事に先立ち、奥田座長から、第5回共通教育再編WG議事要録（案）について確認があり、原案どおり了承された。

【議題】

1. 【継続】共通教育の再編（初年次科目及び担当体制の見直し）について

各部会（初年次、外国語、データサイエンス）長から資料1-1～1-3に基づき、各部会の検討結果について、検討内容及び経緯等について説明があり、質疑応答が行われた。

続いて、奥田座長から資料2に基づき、学士課程における新たな教育科目区分（案）の提案が行われ、質疑応答及び審議の結果、大枠となる「科目区分」については了承され、「細目科目」の分野・領域の配置位置及び「卒業要件単位数」等については、今後引き続き検討が必要との結論となった。

※座長発言要旨及び質疑応答の概要は以下のとおり

《初年次部会報告に関する質疑応答》

大石委員：課題探求実践セミナーについて、理工学部のみ必修科目から外すという点が

よく理解できない。全学共通教育であるので、全学部生の初年次教育、学び方というものを共通的に考えるのが初年次科目であると考ええる。

学部教育に引き付けて、初年次科目がどうあるべきかという議論になっているが、当該科目が不要であるというならば、どのような授業内容であれば意味があるのかという議論が必要なのではないか。

高橋委員：共通的に考えていくことは当然であるが、今回は現在行われている課題探求実践セミナーの内容についてという前提で各学部意見を出したので、そこで出された意見を尊重するかたちとなった。例えば、各学部から教員を動員して全学で開講するという方法もあるだろうが、そこまでの議論には至らなかった。なお、今後分科会等でそのあたりの議論ができればと考えている。

奥田座長：現在の初年次3科目を必修にするかどうかという点では色々な意見が出たようだが、これらの科目を継続するという点では一致している。また、これについては後ほど触れることとする。

《外国語部会報告に関する質疑応答》

(意見なし)

《データサイエンス部会報告に関する質疑応答》

(意見なし)

《座長発言要旨》

今後は、各部会の報告内容をもとに共通教育の新たなカリキュラムについて検討を進めていくことになる。

続いて、資料2について、これは前々回に座長例示として挙げさせていただいたものを基本のかたちとし、前回に学部からいただいた意見を取り入れて修正し、本日あらためて「新しい教育科目区分(案)」として提案するものである。

(資料2冒頭文章による提案の主旨説明)

「新しい教育科目区分(案)」では、学士課程のカリキュラムを5つの教育科目により構成している。第1に「大学での学びかた科目(導入科目)」、第2に「国際理解・コミュニケーション科目」、第3に「数理・データサイエンス・AI科目」、第4に「豊かな知性と人間性を育む教養科目」、そして第5に「専門科目」である。このうち、第1から第4までの教育科目が共通教育の科目区分となる。これら4つの教育科目を立てたねらい、目的の概要等は、前々回説明したとおりである。重複となるが、簡潔にそれぞれの科目区分の内容について説明する。

先程報告いただいた初年次部会、外国語部会及びデータサイエンス部会の検討対象が、それぞれ第1から第3の教育科目と対応している。部会の報告内容は概ねここに反映している。

初年次部会の検討において、現行の初年次科目の「大学基礎論」「学問基礎論」「課題探

求実践セミナー」は原則的に継続実施することが確認されている。これらの3科目は「大学での学びかた科目（導入科目）」に配置した。

同様に、現行の初年次科目である「大学英語入門」「英会話」は、「国際理解・コミュニケーション科目」内の細目科目の1つとして「基軸英語」に配置した。併せて、現行では教養科目の外国語分野に属する外国語科目は、細目科目の「国際英語」及び「初修外国語」へそれぞれ配置した。

外国語部会では、「大学英語入門」「英会話」及び教養科目の外国語科目については、基本的に現状維持するという方針が出されている。しかし一方で、今後は英語をはじめとした外国語教育の拡充は必須であるとの認識も示されている。

第4期中期計画には、**e-learning** 教材の開発、英語による授業の実施、英語のみで学習できる教育プログラムの開発等が記載されている。

これらの中期計画を受け、細目科目「国際英語」では、**e-learning** による英語教育を取り入れ、また、英語で学習できる授業として、**CLIL** による一般学術英語（**EGAP**）を新規に配置した。なお、**e-learning** 教材の開発には、そのためのサポート体制の整備が必要と考えるが、例えば、「オンライン英語学習サイト」の構築を検討中の「外国語教育に係る調査・検討WG」と協働し進めていくことなどが考えられる。

一般学術英語（**EGAP**）の実施についても、教育内容及び方法等を検討、実施するためのサポート体制が必要である。**EGAP** は、教員個々の研究内容について、専門が異なる学生にも理解できるレベルで平易に解説するという様式で行うものである。英語・外国語教員以外の教員による英語の授業として、留学生及び日本人学生が履修することを想定している。

現在でも特に大学院の講義において、英語で授業やゼミナールを実施している講座や研究室があり、また、国際学会等で英語による研究発表をされて来られた教員の経験を活かしたい。

学科レベルの専門性の範囲内において、オムニバス形式（複数教員）で担当し、1学部あたり1-2コマ程度の開講が期待される。

第3の「数理・データサイエンス・AI 科目」では、データサイエンス部会による最終報告に従い、文理共通によるリテラシーレベルの2科目「情報とデータリテラシー(仮称)」及び「データサイエンス入門(仮称)」を配置する。また、細目科目として応用基礎レベルの「DS 基礎(仮称)」を配置する。これに関し、応用基礎レベルの授業は、共通教育で企画・実施することが部会から提案されている。

このほか、「数理・データサイエンス・AI 科目」には、データサイエンスの基礎となる数学、論理学、統計学、プログラミング等の授業を含む細目科目群を並置した。

数学は、次に示す教養科目の自然科学系領域に属する数学関連科目から、データサイエンスに密接に関係する内容を含む授業をここへ抽出し配置する。

統計学は、例えば経済学、農学、生物学分野における統計学の実践的内容を含んだ授業を配置する。

論理学は、集合と命題に関する数学分野だけではなく、言語学など文系の授業も対象として配置できると考えている。

第4の教育科目区分は「豊かな知性と人間性を育む教養教育科目」である。本学教養教育の目的及び教養科目のねらいについては、前回座長の考えを詳細に説明した。

前々回に挙げた座長例示の教養科目は、4つの細目科目としていたが、学部から寄せられた意見を取り入れ、新しい教養科目では、細目科目を3つにし、その構成と内容を修正した。

大きな変更は2つある。1つ目は、「テーマ別複合領域科目」であったものを「視野を広げ世界観を培う科目」とし、その内訳を分野別とテーマ別の授業に区分したことである。2つ目は、SDGs 関連科目を独立した細目科目であったものから、「視野を広げ世界観を培う細目科目」の内訳の1つ、「テーマ別複合領域」へ移動させたことである。

まず、1つ目の細目科目「生きる力を育む科目」では、主として現行の教養科目の生命・医療分野及びキャリア形成支援分野に含まれる授業が入る。それら以外に、衣食住に係る生活科学、生きる力や感性を高める文学や芸術関連の授業をここに配置する。また、現実社会の構成員として、税制に関することや社会保障を支える法律やしぐみを知り、安心・安全な環境を維持する重要性などを学ぶこととする。これら以外にも「生きる力を育む科目」の趣旨に適合する授業があればここに配置する。それらの授業科目は、現行の人文分野又は社会分野から、こちらの細目科目群へ配置換えすることを想定している。

2つ目の細目科目は「視野を広げ世界観を培う科目」である。この中に分野別・テーマ別の授業科目群を配置する。その内の1つは人文・社会科学系領域の授業科目群である。ここには文字通り、人文分野科目及び社会分野科目が含まれる。人文分野科目及び社会分野科目を一つにまとめた理由は、ある一定の授業は、前述の「生きる力を育む科目」へ配置換えすることが一点。もう一点は、人文・社会科学系分野を担当する教員が少ないためである。

自然科学系領域の授業科目群には、自然分野科目及び環境・生命科学分野科目が含まれる。データサイエンスの基礎又はそれに関連する数学の一部や自然科学分野で扱う統計学等は、「数理・データサイエンス・AI 科目」へ配置換えすることを想定している。

もう1つの領域は、テーマ別複合領域の授業科目群である。ここに SDGs 関連科目を配置している。さらに、SDGs 関連以外のテーマをもつ授業は、総合科目として配置している。これらの授業は、学部や専門分野が異なる複数の教員が共通のテーマにより、オムニバス形式で実施することが考えられる。テーマ別複合領域全体で5コマ以上程度の開講が期待される。なお、複合領域の授業を企画するためのコーディネーター又は支援組織が必要と考える。どのようなテーマを設定するか、担当教員のリクルートや組合せ等を調整する役割を担うこととなる。

教養科目の3つ目の細目科目は、前々回の座長例示でも挙げていた「高学年次教養科目」である。この科目の意義及び目的の概要は、今回添付した参考資料1に記載がある。

日本における新たな教養教育の展開「高年次教養教育の挑戦」と題されたこの記事の一部を引用すると、「高年次教養教育」のねらいは、「自分の専門分野の内容を専門の異なる人に説明でき、自分の専門分野の社会的意義を理解できるとともに、その限界を知って相

対化できることとなる。さらに、異分野の人と協力できることも含まれる。そのために、専門教育をある程度受けた高年次の段階で、異分野の学生と交流しながら対話型で進め、高度なコミュニケーション能力を育成する授業がモデルとされる。異分野との交流の幅は、学部主体の科目から全学的な科目、さらには文理融合的科目まで実際には様々である。しかしいずれにしても、学生各自、もしくは学生相互の専門分野が核となって構成される教養教育である。これは長年提唱されてきた教養教育と専門教育との有機的統合の一つのあり方といってもよいかもしれない」と述べられている。

これは言わば、専門知識の社会化への取組・導入教育と呼んでいいものと考ええる。高学年次教養科目の目的設定、教育内容及び実施方法等を検討するサポート体制は必須であると考えるが、このような高学年次教養科目をカリキュラムに取り入れている大学は全体の25%にも及ぶことを、今般のカリキュラム改革において意識、考慮しておいた方が良いと思っている。

なお、参考資料1の末尾に関連するURLを貼っているが、最後の4つ目のURLには、文科省による大学におけるカリキュラム改革の実施状況調査のまとめが示されている。その一部には、全国の大学で行われているカリキュラム改革において、科目区分の見直しを行った大学は、国立大学では70%に上っているという結果が出ている。このことから、本学共通教育のカリキュラム再編に際し、新しい教育科目区分の導入について検討することは、何ら間違った方向性ではないと考えている。

資料2（P.40）の＊（アスタリスク）では、地域関連科目の扱いについて記載しているが、現行のとおり、教養科目の中から地域関連科目をあらかじめ大学側が指定し、学生は各学部で定められた単位以上の地域関連科目を履修するという要件を付けることとする。

そして最後の5つ目の科目区分が「専門科目」となる。以上が今回提案する「新しい教育科目区分（案）」である。

《提案のあった5つの教育科目区分の大枠に関する質疑応答》

岡谷委員：2点伺いたい。国際理解・コミュニケーション科目の初修外国語は、現行の教養科目外国語分野にある初修外国語と同じ内容の科目となるのか。また、卒業要件単位数（モデル）の表では、共通教育の卒業要件単位数が38単位となっているが、その根拠及び専門科目との単位数の兼ね合いはどのように考えているのか。

奥田座長：初修外国語についてはそのとおりである。

後者についてはまず、モデルケースであるということを申し上げておく。各学部の特性に応じて指定いただければよい。

大石委員：国際理解・コミュニケーション科目は語学を指すのか。地域文化理解のような幅広いものも含めているのか。

数理・データサイエンス・AI 科目の細目科目にある数学、統計学、論理学などは、どのくらいの広さを持っているのか。

奥田座長：国際理解・コミュニケーション科目の中心は語学であるが、外国語そのもの

を学ぶだけではない。国際理解と外国語を駆使したコミュニケーションに関連する授業も含まれるイメージである。この教育科目のねらい、目的を的確に理解、確認した上で、細目科目については今後詰める必要がある。

数理・データサイエンス・AI 科目の細目科目に「数学、統計学、論理学など」を配置した理由として、国は人文社会科学系の学生にこのような素養を身に付けさせたいようである。例えば、数学を苦手とする文系の学生が、必須科目となるこれらのデータサイエンス関連科目を受講するにあたり、授業を理解するための基礎的知識、内容を学んでおく必要があると考え配置した。

大石委員：後者に関し、リテラシーレベルを修得させるために、どのような周辺科目が必要であるか、全体の科目構成や授業の目的、役割等についてよく議論し、精査する必要があると考える。

奥田座長：そのとおりである。授業を担当される教員は、授業の目的とレベルをしっかり理解した上で担当いただく必要があると思っている。

枝重委員：細目科目については、まだ問題がありそうなので、今後検討が必要である。また、提案の内容は実現するためのマンパワーが足りないのではないか。以前も申し上げたが、身の丈にあったプログラムにしていく必要があると考える。現在問われているのは教育科目区分の大枠についてということで間違いないか。

奥田座長：そのとおりである。細目科目やマンパワーに関しては、全体のバランスを見つつ、今後の検討が必要であることを理解している。

津江委員：細目科目について、国際理解・コミュニケーション科目内の「CLILL による一般学術英語」や数理・データサイエンス・AI 科目内の「数学、論理学、統計学など」は非常に違和感がある。また、生きる力を育む科目には、色々な科目が入り過ぎているので、学問的な体制としては検討の余地があると感じる。

1～4 の大枠についてはこれで良いが、細目科目は今回議論外という理解でよい。

奥田座長：その理解でよい。

佐々委員：数理・データサイエンス・AI 科目のリテラシーレベルについては、文科省のリテラシーレベル認定制度の認定を受けることを想定した科目として部会で検討したものである。「数学、論理学、統計学など」は、応用基礎レベルの選択科目として並べるのであればよいが、リテラシーレベルを行うための基礎の科目とするのであれば、これを DS プログラムに取り入れる必要が出てくる上、認定制度に通らなくなる可能性も出てくるので、できればリテラシーレベルは必修 2 科目のみとし、それ以外は選択科目としていただきたい。

奥田座長：この内容は、このあとの卒業要件単位数（モデル）の説明でも触れるが、リテラシーレベルのデータサイエンス科目以外の授業科目は選択としている。頂いた意見は、今後の議論の中で対応していきたいと考えている。

奥田座長：5つの教育科目分のうち、共通教育に係る 1～4 の大枠については理解いただいたものとさせていただく。

《座長発言要旨》

続いて、本日提案した教育科目区分（案）のうち、4つの教育科目を共通教育カリキュラムの大枠とすることを理解いただいたことを前提に、それぞれの教育科目及び細目科目における卒業要件の単位数を設定し、必修と選択必修を指定した。資料2（P.41）の共通教育卒業要件単位数の表はそのモデルケースとして作成したものである。

先ほど、学部として共通教育の卒業要件単位数が多いという意見をいただいたが、これはあくまでモデルケースである。この単位の配当は、申し上げたように各学部の特性に応じて決めていただければと考えている。

まず、大学での学び方科目（導入科目）は、「大学基礎論」「学問基礎論」「課題探求実践セミナー」からなり、それぞれ2単位の必修科目とする。ただし、理工学部では「課題探求実践セミナー」を選択科目としている。

国際理解・コミュニケーション科目では、基軸英語の「英会話」「大学英語入門」の2科目をそれぞれ2単位の必修科目とする。

現行の教養科目の外国語分野については、修得単位数を指定している学部と指定していない学部があるが、新しい教育科目区分では、3つの細目科目「国際英語、EGAP、初修外国語等」から4単位以上を選択必修とし、国際理解・コミュニケーション科目全体の卒業要件単位数を8単位以上とした。外国語分科会の報告にもあるように、他大学における外国語の卒業要件単位数は8単位から10単位の範囲で設定されている大学が多数であることから、本学のこの8単位は妥当であるか、又は平均よりもやや少ない単位数となる。また、現行では、複数の学部が教養科目の外国語分野の履修単位数を指定しているが、このモデルでは3つの細目科目からの選択必修としたのは、外国語を担当する教員が減少しているという本学の事情も勘案してのものである。

数理・データサイエンス・AI 科目では、データサイエンス部会の報告のとおり、リテラシーレベルの2科目「情報とデータリテラシー」「データサイエンス入門」をそれぞれ2単位の必修科目とする。

残りの2つの細目科目のうち、1つを応用基礎レベルの「DS 基礎」とし、もう1つを「数学、統計学、論理学など」の科目として、そのどちらかから2単位以上を選択必修することとした。このあたりは、先ほど意見をいただいたとおり、今後議論する必要があると考えている。

既に先行実施されているリテラシーレベルの2科目の開講も含め、その担当体制を早急に具体化する必要がある。また、応用基礎レベルの「DS 基礎」の内容を検討するために、データサイエンス教育推進WG又は教育情報委員会による学部との協議が必要である。

新たな教養科目では、生きる力を育む科目に属する授業科目から4単位以上を選択必修とした。

視野を広げる科目には、3つの領域別に分類された授業科目を含むが、人文・社会科学系領域の授業科目から4単位以上選択必修、自然科学系領域の授業科目から4単位以上選択必修、複合領域の授業科目から2単位以上を選択必修として指定した。さらに、高学年次教養科目を含め、教養科目全体から4単位以上を選択履修し、卒業要件単位として計 18

単位以上、うち地域関連科目を4単位以上含むという条件とした。

本モデルケースでは、共通教育全体で必修科目は14単位（理工学部は12単位）、選択必修科目は24単位以上、合計38単位（理工学部は36単位）となるものである。

今回提案した新しい教育科目区分（案）について、そのねらいや科目区分の構成及び卒業要件単位数の配当などは、本学の教育をどのような内容及び方法で行うかというカリキュラムの考え方と骨格を示す大変重要なものであると考える。

《教育科目区分の大枠及び共通教育卒業要件単位数（モデル）案に関する質疑応答》

津江委員：細目科目の単位配当については、細目科目の中身の議論が途中であるので、それが決定してから行うという認識でよい。また、卒業要件単位数も学部で決めることができるという認識でよい。再度確認したい。

奥田座長：細目科目については、その区分の教育目的、ねらいに合致する科目を定めたり、同じ目的を持つ科目を集めて細目を作るなど、色々な考えがあるので、そのようなことも含め、細目科目の内訳については検討の余地があると思う。それが決定しないと単位の配当もできないというのは理解できるので、今後はそれらも併せて確認していく必要がある。

津江委員：数理・データサイエンス・AI 科目の中に「数学、論理学、統計学など」が入っているが、自然科学系としての数学はどうなるのかが気になる。また、外国語の EGAP に関し、学術英語をしっかりと行っていくためには、どうすればよいかなどについて、現在、学部内で議論しているので、細目科目の詳細については今後また検討させていただきたい。

奥田座長：先ほどの説明でも、このような細目科目にはサポート体制が必要であることを述べさせていただいたが、これらについては、今後の検討が必要であるということは意識している。それらも含めて案として出させていただいた。

大石委員：外国語部会の報告では、「英会話」「大学英語入門」は初年次科目に残すという結論であったにも関わらず、今回の提案では、国際理解・コミュニケーション科目として提案されたことの整合性について理解ができない。

数理・データサイエンス・AI 科目について、特に「数学、論理学、統計学など」に関し、座長と部会長の説明に大きな隔たりがある。

教養科目について、「生きる力を育む科目」と「視野を広げ世界観を培う科目」において個々の科目を立てる際の違いがよく分からない。

高学年次教養科目について、かなり以前に開講されていた時のうまくいかなかった経験も踏まえると、実施はかなり困難な印象である。

また、総合的教養教育の考え方として、学士課程全体が総合的教養教育に含まれるということなので、共通教育の中で敢えて高学年次の教養科目を設置する必要性はないと個人的には思っている。

奥田座長：国際理解・コミュニケーション科目に置いた「英会話」「大学英語入門」について、部会は初年次科目として維持したいとのことであったが、座長としては、敢えて初年次ということには拘らず、この教育科目の目的やねらいに応

じてここに配置した。

数理・データサイエンス・AI 科目の細目科目「数学、論理学、統計学など」について、座長の考えと部会長の考えは乖離しているが、座長としては、特に文系の学生が当該科目を履修するにあたり、授業を適切に理解するための基礎的な数学、統計学的な知識を学ばせておく必要があると考えている。一方、部会長は、それはむしろ応用基礎レベルと並置し、ここで言うところの DS 基礎に並べるかたちで選択科目とする方が良いとの考えである。今後はこのあたりの適切な科目配置等について検討が必要である。

教養科目の「生きる力を育む科目」と「視野を広げ世界観を培う科目」は全く趣旨の異なるものである。学部から、教養科目であっても異分野の学問に触れてもらうということを学生に示した上で受講させる方が良いという意見があったので、「視野を広げ世界観を培う科目」には、人文・社会科学系領域と自然科学系領域を分野別というかたちで置いた。それにプラスして SDGs 関連科目等を含むテーマ別複合領域を並置したかたちである。

対して、「生きる力を育む科目」は、現行の医療、健康、スポーツ、メンタルヘルス、キャリア教育関連の科目をはじめ、衣食住に関する生活科学、心豊かに生きるための文学、芸術、哲学など、感性を磨き、自身のモチベーションを向上させるような科目がこれに該当する。これらは、人文科学系領域に含めるという従来型の考え方もあると思うが、個人的には、芸術（美術・音楽・書道・工芸など）は人文分野ではないと思う。座長としては、学生が健康で豊かに生きていくためのベースとなる科目としてここに配置し、「視野を広げ世界観を培う科目」とは趣旨、ねらいの異なる科目であると捉えている。敢えて、高学年次教養科目を残したが、以前開講されていたこの授業（総学科目）の評判が良くなかったのは、授業の方法が良くなかったことが原因と思っている。また、総合的教養教育は共通教育だけではなく、学士課程全体の教育理念を指すということを全学的に理解いただいているかどうかの点であるが、専門教育こそが学士課程教育の中核を為すと捉えている教員にとって、その専門教育も教養教育の一部であると言われた際の当時の反発は大変大きなものであったと思う。

学部を超えて共通に必要な力、態度、生きる力を与えていくことは共通教育の使命だと考えている。ここで示す高学年次教養科目は、3-4 年になった学生が専門の知識も入ってくる中で、以前に習った教養教育がこのあとどのように生きてくるのかということがこの高学年次教養科目を履修することで分かってくる。いわゆる専門知識を「社会化」できるのである。これまで閉じていた知識が広い視野を持つことにより、自身の専門が別の専門分野でも活かされていることを実感するかもしれない。それは学生にとって自分の立ち位置を自覚するまさに知識の「社会化」への学びであると思う。

高学年次教養科目の内容及び検討する組織、サポート体制など課題は多いと思うが、それらを検討することに意義を見出してほしいとの希望から、今回提案させていただいたものである。

大石委員：理解できた部分とできなかった部分があるが、もう少し出席者全体での議論

があれば良いと思う。

奥田座長：本WGの実質的な議論は、次回の2月が最終となり、3月は全学教育機構会議への答申となる予定である。したがって議論ができるのは、次回までということになる。

津江委員：高学年次教養科目については、大石委員の意見に賛成する。

楔型教育などと呼んで昔開講されていたが、うまくいかなかった。他大学の学部長にも伺ってみたが、結局何を教えて良いか分からず、レベルを下げた専門科目のようになってしまうということで、その目的を達成できるのか危惧するところである。

また、「生きる力を育む科目」について、やはり学問としての哲学、宗教学などもあるかと思うので、健康、スポーツ、メンタルヘルス等と同じカテゴリに入れて卒業要件単位を課すことに危惧はあるが、それらは今後の検討課題として検討いただくとして、今回の座長提案に対する理解はだいぶ深まった。

奥田座長：おっしゃるとおり、これらは今後の検討課題である。本日の提案について、座長の考えは伝えることができたのかなと思っている。

《座長発言要旨》

色々なご意見、ご示唆をいただいたが、新しい教育科目区分及び単位配当の案は、細部において改善の余地を多数残している。しかし、来年度から第4期中期目標計画が始まるというタイミングであるので、共通教育のカリキュラム再編は待ったなしの状況である。

本WGを引き継ぎ、来年度すぐに共通教育のカリキュラム再編に向け、具体の検討を継続できるように、今回提案した教育科目区分の枠組み（大枠）の構成を基本とし、今後も適正に修正、改善を行っていくという条件で、この大枠に沿って検討を進めていくことに合意いただけるか。

（大枠については了承）

なお、先程意見のあった細目科目の内訳及び卒業要件単位数の配当等については、学部に持ち帰り検討いただきたい。その上で文書にすべきご意見等がある場合は、2月21日（月）までに学務課全学・共通教育係に連絡いただきたい。

本日は、この5つの教育科目区分のうち、共通教育に係る4つの教育科目区分の大枠についてお認めいただいたということにさせていただく。

次回WG（2/28）では、3月の全学教育機構会議へ提出するための答申案について議論を行う予定である。

2. その他

なし。